

# 日本で初めて発生が確認されたスモモミハバチの発生生態と防除対策

スモモの幼果が肥大を停止し、落果する主な原因は、スモモミハバチ幼虫による加害である。成虫はスモモの開花期にがくに産卵し、幼虫は落弁直後に幼果に食入するため、満開期から落弁期のアセタミプリド水溶剤散布で高い防除効果が得られる。

## 成果の内容

### 1 発生生態

- (1) スモモミハバチの被害果実は肥大を1 cm程度で停止し、5月中旬～下旬に落果する。果実表面には、産卵痕が小さなくぼみとなって残り、直径2 mm程度の脱出口があく(図1)。
- (2) 幼虫脱出前の被害果には1果に1頭の幼虫が入っており、内部に黒色顆粒状の糞を蓄積する(図2)。
- (3) 2019年5月から2021年4月に県内のスモモ樹を調査した結果、山口県のほぼ全域で発生している。無防除では収穫皆無となる樹も多いが、アブラムシ類を防除している経済栽培園での被害は少ない(図3)。
- (4) スモモミハバチの成虫は、雌雄とも体長約5～6 mmで体色は黒く、発生予察用白色粘着トラップ(SEトラップ、サンケイ化学株式会社)で誘殺される(図4)。誘殺時期はスモモの開花始め～落弁期である。雌雄の誘殺数は3月はほぼ同じだが、4月以降は雌の誘殺数が減少する(図5)。
- (5) 雌成虫はスモモのがくの表皮下に1～2個産卵する。ふ化した幼虫はがく落ち期までに幼果に食入し、1個の果実を内部から食害する。5齢を経た幼虫は5月上～中旬に果実から脱出し、土中に潜って土繭を作った後、蛹化してそのまま越冬する。上記の生態から本虫は年1化である。

### 2 防除対策

- (1) 満開期から落弁期にアセタミプリド水溶剤(4000倍)を1回散布することで、高い防除効果が得られる(図6)。
- (2) 有効な天敵は見つかっていない。

## 成果の活用面・利用上の留意事項

- 1 スモモミハバチは中国および韓国に分布している外来種で、2019年に国内で初めて確認され、スモモのみを加害する。
- 2 被害果はほとんどが5月下旬までに落果するが、まれに黒化して翌年まで枝に残ることがある。
- 3 アセタミプリド水溶剤(顆粒)は、2021年3月にスモモミハバチに対し、2000～4000倍で農薬登録(適用拡大)されている。
- 4 幼虫は落弁直後に幼果に食入するため、防除が遅れないように注意する。

## 具体的なデータ



図1 スモモ幼果の被害



図2 スモモ幼果内のスモモミハバチの幼虫

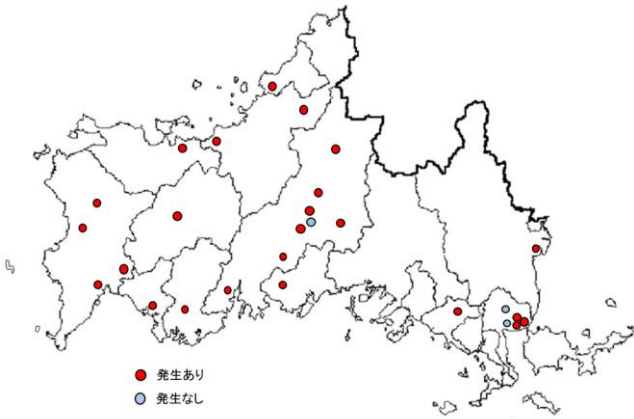


図3 スモモミハバチの発生状況  
(2019年5月～2021年4月調査)



図4 白色粘着トラップに誘殺されたスモモミハバチ成虫 (左:雌、右:雄)

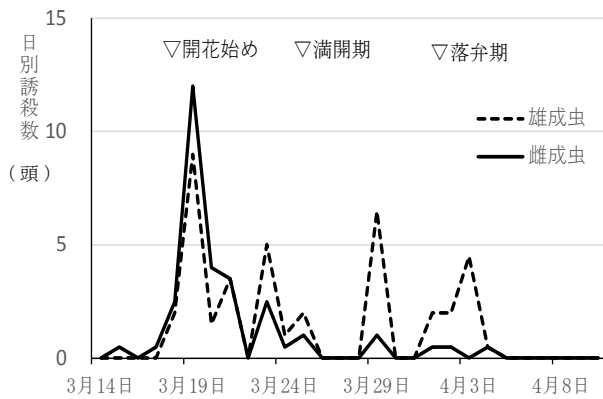


図5 白色粘着トラップによるスモモミハバチの誘殺推移  
(2020年山口市)

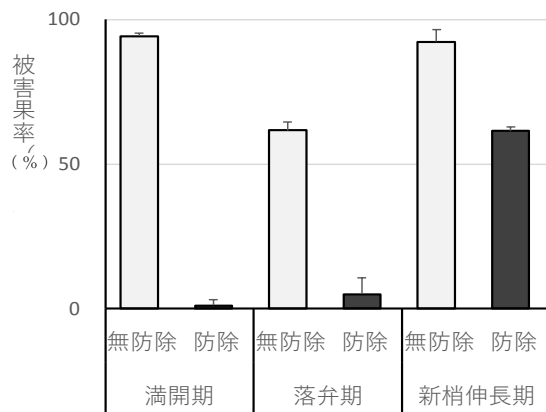


図6 スモモミハバチに対するアセタミプリド水溶剤の防除効果

## 関連文献等

植物防疫. 75(1):P37-40 (2021)

令和2年度農林総セ試験研究発表会発表要旨: P72

研究年度	令和元年度～令和2年度 (2019年～2020年)
研究課題名	植物防疫事業 (侵入警戒病害虫対策)
担当	農業技術部 資源循環研究室 溝部信二・東浦祥光